

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

イタリアで生まれ育った「ぼく」(ユージ)は十四歳で、音楽院の四年生である。夏休みを利用し、有名なフルート奏者であるマウロ・ビーニ(マエストロ師匠)が主催する二日間のマスタークラス(特別講習)に参加している。

みんなの演奏を聴いて、青ざめた。全員がサンドロと同じか、それ以上のレベルだ。もともと、名門音楽院の七年生や大学の生徒たちだから、当然かもしれない。ぼく以外の平均年齢は二十歳ぐらいだろう。

苗字のアルファベット順で、十二時から、ぼくの番になった。

おそろおそろ、楽譜を譜面台にのせる。夏休み前にサンティーニ先生から渡されたチュールの『グラン・ソロ』だ。この一か月半、毎日三時間以上練習してきたから、それなりに仕上がっていると思う。でも、初めて有名なフルーティストを前にして、ぼくは異常に緊張していた。

「あれれ、緊張してるのか？」

と、マエストロがぼくをからかうようにいった。

「は、はい」

「オレ相手に緊張しても意味ないぞ。どうしても緊張したいなら、明日の本番にしてくれ。本番の緊張は必要だからな。ま、適度なやつなら、だけどね！」

お茶目なマエストロに、ぼくは思わず笑う。

「そう、その調子。じゃ、聴こうじゃないか」

深く息を吸ってから吹きはじめる。マエストロは黙って体を揺らしながら聴いている。

吹きおわたとたん、「よし、じゃ」と、マエストロがいつて、楽譜を閉じてしまった。

「ずいぶん吹きこんできたな。きみはこの曲をなかなかよく表現している。ただ、欠点がある。それには……もう見なくても吹けるだろう？」

「あ、はい、たぶん」

「暗譜をしたほうがいいのは知ってるだろう？ 見ると、どうしても音符を目で追うからだ。それぞれの音の意味だけじゃない。曲として、音楽としてとらえるんだ。ところできみは、だれに向かって吹いている？」

「は？ えーっと、先生に……」

「ちがうちがう。ここは舞台だ。一番後ろの客には聴かせないつもりかよ？」

ドキツとした。

「せまいトイレの中で自分のために吹くのか？ ちがうだろ？ あした、お客さんが、あそこの一番後ろの席までぎっしり入るんだ。なにしろ無料のコンサートだからな、立ち見だっているかもしれないぞ。そういう人たちみんなに届けなきゃ」

「はい」

「そのためには、もつとのどを開いて。そして、遠くに音を飛ばすことを意識しながら吹くんだ。とくにここは、こんなふうに」マエストロは楽譜を見もしないで、客席を見ながらさらっと吹きはじめる。

うわっ。出だしからもうぜんぜんちがう！

音の響き方がすごい。なんというポリュームだろう。なんという抑揚だろう。音がつやつやだ。その迫力に、よるめきそう

だ。

マエストロは途中でやめて、にんまり笑った。

「圧倒されたか？ 同じ音を出せとはいわん。まあ、オレはプロなんだからあたりまえだし、この腹という名アンブがあるし、年季もちがう。が、いわんとすることはわかっただろ？」

ぼくはうなずいた。

「それと、フルートも格段にちがうしなあ」

マエストロは、ぼくのフルートを見ながらいった。

「あの、テクニクがないのはもちろんなんですけど、このフルートじゃ、もうだめなんですか？」
不安に思っていたことをストレートに聞いてみた。

「ま、楽器の質も重要だけど、それだけじゃないからな。ただ、それはちよつと……見せてみて」

マエストロは、ぼくのフルートを受けとると、「吹いてみてもいいよな？」と聞いた。

「あ、ちゃんと消毒します」とあわてていったら、先生は「いらないよ。きみはへんな病気もつてないだろう？」と笑って、おもむろに吹いた。

ぼくとはぜんぜん音がちがうけど、さっきの先生のゴールドのフルートに比べると、雲泥の差だ。

「うーん……」

マエストロが吹くのをやめて、フルートのキーをあれこれ押さえながら、うなった。

「やっぱり、買いかえなきゃいけないんでしょうか？」

おそろおそろ聞くと、先生は首をかしげた。

「このフルートは悪くないし、故障もなさそうだ。しかし、決定的に高音と低音がイケてないなあ」

ああ、やっぱりそうか。ぼくがあんまりがっかりした表情をしていたからだろう。マエストロはぼくにフルートを返してくれながら、

「おいおい、そんなに落ちこむなよ」

といってくれた。

「なにも、今すぐ買いかえなくてもいいさ。ただ、きみは秋から五年生だろう？ 五年生のレパートリーだと、ちよつときつかもなあ。オレも若いころ、買いかえるのに困ったさ。あつちこつちでバイトして、それでも金が足りなくて、親に頼みこんで、必ず返すって約束してさ。で、プロになってからちゃんと返したんだけど」

「けど……？」

「うちの親はちやつかりしててな、利子の分まで請求しやがった。はっはっは！」

ぼくも思わず笑ってしまった。

「ユー・ジ、今はこのフルートで最大限の効果を出すことを考える。きみには、曲を自分の内側に取りこみ解釈する音楽性がある。ただ、表現するときに、どこかおっかなびつくりなんだな。ミスをするんじゃないか、息づきは一小節先だからそれまでがまんだ、あとちよつとだ、みたいな感じでさ」

① 図星だ。自分の顔が赤くなっていくのがわかる。

「心配するな。たぶんきみはもうこの曲ではミスはしないだろう。このマスタークラスはコンクールじゃない。びくびくしながら吹くな。どうしても息が続かないなら、ひっそりとどこかで息づきしろ。たとえば、ここだ」

マエストロは息づきをしてもいい箇所を吹いてくれた。マエストロの頭の中には、いったい何十曲の楽譜が記憶されているんだろう。ぼくはあわてて楽譜を広げ、記号を書きこむ。

「そのかわり息をケチるなよ。ケチるからボリュームが出ないんだ。さあ、もう一回！ 楽譜は閉じろ！」

マエストロはスタスタと歩いて、会場の一番後ろに立った。

ぼくが吹きはじめたとたん、先生はどなった。「吹け！」「もっと！」「腹から！」「オレの言葉でいちいち停まるな、続けろ！」

「吹け！」「届かないぞ！」

ぼくは精いっぱいのを開放し、会場の奥にいる先生に音を届けようと必死になる。

「よし、今の調子！」「吹け！」「もっと吹けーっ！」

先生は飛んだり跳ねたり、両手をぶるんぶるん振りまわしたりして、すごい運動量だ。見ているほうが苦しくなってくる。

吹きおわり、ぼくは長距離を泳いだあのように、ヘトヘトになっていた。一年分の息を使い果たした感じだ。

マエストロがつかつかと歩いてきて、親指を立てた。

「最後のほうはよかったぞ。音が会場の奥まで伸びてきていた。あの調子でいけ。それとな、『楽しい』って漢字は、もともと音楽って意味なんだろ？ なんかそういうようなことを、知り合いの日本人に聞いたことがある。とにかく、音楽ってのは、楽しむもんだ」

「は、はい」

「音を楽しめ。そして客も楽しませろ。まあ、飯でも食って、休め。午後は午後できついからな」

「はい！」

ぼくは会場の奥の席にすわって、しばらくぼーっとしていた。息は切れていたけれど、体中にエネルギーがみなぎっている。音を楽しめ。そして客も楽しませろ。

そうだ。それが音楽だ。

テクニクは必要だ。音が客席に届かないなんて話にならない。表現するためにはテクニクが必要なんだ。そしてテクニク

クを習得した者こそ、そのガチガチの殻を突きやぶり、曲を自分なりに解釈して表現することができるんだ。

フルートを拭いていると、次の順番の女の人がライネッケの『フルートソナター六七番』を吹きはじめた。ローマ・サンタ・チエチリア音楽院の七年生で、十八歳といっていたけど、テクニクも、表現力も、とても成熟している。たしかテクニクに支えられた表現力。ぼくのようにぎりぎりのところで吹いているんじゃないくて、息にも指使いにも余裕がある。こんなすごい演奏でも、まだ直すところがあるんだろうか。

もう一度吹けと指示されて吹きはじめた彼女に、マエストロは全身でジェスチャーをまじえながら、大声で指導しはじめた。あわてるな。ドバーツと息を吹きこむな。そこは愛しい人に優しく息を吹きかけるようにして、次第にボリュームを上げろ。ていねいに！そこはもつと抑えろ。クライマックス！

彼女は、マエストロにいわれたとおりに最初から吹きなおした。直される前も完璧だったと思っていたのに、今はさっきの演奏がどうしてダメだったのか、ぼくにもわかった。あきらかに、二倍も三倍もよくなっているのだ。

頭がくらくらしていた。ワクワクしていた。疲れ果ててはいたけれど、今すぐにでもまた吹きたい衝動にかられていた。でも、まずは、エネルギー補給だ。水を飲み、おにぎりを二個たいらげ、ひと息つく。

よく考えると、ぼくたち生徒はそれぞれ休憩を取っているが、マエストロは朝からまったく休んでいない。ぼくはラップに包まれた最後のおにぎりを手に、立ち上がった。

「五分休憩！」といって、イスに倒れこむようにすわって水をがぶ飲みしているマエストロのところに、そのおにぎりを持っていく。

「あ、あのー。もし……こんなものでもよければ」

と、おそろおそろ差し出すと、マエストロはにっこりした。

「ありがたいが、オレ、今ダイエット中なんだよ。見ろよ、この腹！んー、でもなんかそれ、うまそうだな。ま、一個ならいいか！」

マエストロは、いたずらっ子のような顔をしながらぼくからおにぎりを受けとり、かぶりついた。

「あ、これ、公演で日本に行ったとき、食べたことがあるな。うまいよな！最近ミラノにもこれ売ってる店ができたって噂

を聞いたぞ」

もぐもぐいいながら、マエストロはあつという間におにぎりをたிரらげた。

「もう一個ないの？」

ぼくは笑って首を横に振る。

「すみません。最後の一個でした」

「しょうがない。ダイエットモードにもどるか。よし、じゃあ再開だ。次！」

次の生徒が、クスクス笑いながらフルートをかまえた。

ぼくがおどろいたのは、マエストロの指導力や、やる気を出させる強力磁石みたいなパワーだけじゃない。フルーティストで指揮者でもあるマウロ・ビーニの、アレンジ力と指揮力だ。

マエストロは、生徒八人に自分を加えたフルート・アンサンブルを編成した。そしてチャイコフスキーの『くるみ割り人形』をアレンジした楽譜を配った。マエストロはスカラ座のオーケストラ活動のほかに、普段からフルート・アンサンブルを編成し、自分がアレンジした曲を指揮しているらしい。今回は、そのメンバーにもなっている生徒のひとりにバスフルートを持ってこさせ、他のふたりがアルトフルート、マエストロを含めて五人がフルート、そしてひとりがピッコロという編成だ。

マエストロはかたくりしいやり方が嫌いで、お客さんが喜ぶように曲を選び、順番を決める。たとえば、ある生徒に、マエストロはこういった。

「第三楽章はまだ無理だな。③じゃ明日は、第二楽章、第一楽章の順に吹けよ」

ぼくは耳を疑った。クラシック音楽では、そういうことは許されていないと思っていた。作曲家への冒瀆になるとか、楽譜に忠実でないといけないと教えられてきたからだ。

「客は、最後はしみじりじゃなくて、盛り上がって終わってほしいものなんだ」

と、マエストロはいった。第二楽章はアダージョで、ゆったりとしていて悲しい。第一楽章は明るいから、あえて順番を逆にしたのだろう。

「クラシック音楽だって、エンターテインメントだからな！」

ますますびっくりした。クラシック音楽がエンターテインメント？

初日のグループ練習では、いくらぼくをのぞく全員がハイレベルのフルーティストでも、さすがになかなか合わなかった。たった二日でフルート・アンサンブルをやるなんて、マエストロはムチャクチャだと内心思った。いきなり編成して、お客さんが聴いて楽しめるようなレベルに仕上がるわけがない。実際、発表会直前のリハーサルでも、マエストロはなんでも大声でどなった。二日目の夜八時。いよいよ本番だ。入場無料なのに、お客さんは少なかった。もつとも、七月下旬は住民がバカンスで街からいなくなり始める。そのせいかもしれない。ツーリストがちらほら来ているだけ、という印象だった。

ぼくはトップバッターだけど、パラパラとしかすわっていない客席を見て残念に思っている自分が意外だった。人前に出るのは好きじゃないはずなのに、どうせならたくさんの人に聴いてほしいと思っていたのだ。

マエストロがいていた「適度な緊張感」のおかげか、体中を駆けめぐるアドレナリンは多すぎることも少なすぎることもなかった。この曲に関しては、もうテクニクは十分みがき、先生に指導された息の使い方も上達し、不安はない。

舞台上上がり、客席を見まわし、頭を下げ、ピアニストとうなずきあう。

ピアノ伴奏が始まる。

チュルルの『グラン・ソロ 第五番、作品七九』は、哀愁に満ちた曲ではないから、ひとりで吹いていたときはあまり好きではなかった。でも、ピアノといっしょだとぜんぜんちがう。長いピアノ伴奏が続く、いきなりフルートが夏の稲妻のように入る。なんともいえないパワーを感じながら、ぼくは吹く。やがてゆったりとしたメロディになり、また最初の激しい感情にもどる。体中が火照る。

二度しか合わせていないのに、ピアニストはまさにプロで、完璧に合わせてくれる。ピアノといっしょに演奏する心地よさを味わうのはボーエンとやったとき以来だ。

演奏を終えると、会場から、大きな拍手が起きた。いつのまにかお客さんが増えていた。そして舞台の袖では、七人の仲間が、派手に拍手をしてくれていた。ピューピュー口笛も吹いて「ブラーヴォ！」を連発し、盛り上げてくれていたのだ。

頭を下げて舞台の袖に引っこむと、仲間たちにもみくちやにされ、マエストロがドスン、とぼくの背中を叩いた。

「ユージ！ リハーサルより数倍よかったぞ。本番に強いな。世の中には逆の人も多んだよ。きみは舞台じゃぜんぜんシャイじゃないね。コンサートに向いているよ。臆せず、じつに豊かに表現していたぞ。このまま、どんどんフルートを続けなさい」

「はいっ！」

長いことくすぶっていた炭に、やっと火がついたような気分だった。涙がこみあげそうになっていた。フルートを続けなさい、という言葉をもらえたからなのか、自分がフルートを続けたいと強く思ったからなのかはわからない。ただ、吹く喜びを感じていた。

仲間たちにも励まされた。たった二日間を共に過ごしただけで一体感が生まれたのは、マエストロのきびしくも温かい人柄のおかげと、アンサンブルでいっしょにやる喜びを味わえたからだろう。

みんなは口々に、マエストロ・ビーニのもとでずっと習いたかったといった。でもマエストロはオーケストラの仕事で忙しいから、音楽院では教えていない。だからこそ、年に二回ほどやる短期のマスタークラスは、ほんの一、二時間で定員に達してしまうのだ。たまたま入れたぼくはすごくラッキーだったんだと、みんなにいわれた。そして「来年はオレたちといっしょに最初から申し込めよ」とも。

もちろんぼくはみんなに約束した。この二日間のマスタークラスで、目が覚めた。やっぱり音楽は楽しい！ 来年は最初の数秒以内に申し込もう。

(佐藤まどか『アドリブ』)

(注1) サンドロ……音楽院のぼくと同級生で、優秀な学生。

(注2) サンティーニ先生……ぼくとサンドロの音楽院の先生。

(注3) エンターテインメント……楽しみ。エンターテイメントともいう。

問一 ―線部①「凶星だ。自分の顔が赤くなっていくのがわかる」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちを、「凶星」の内容も明らかにして、説明しなさい。

問二 ―線部②「今すぐにでもまた吹きたい衝動にかられていた」とありますが、それはなぜだと考えられますか、説明しなさい。

問三 ―線部③「じゃ明日は、第二章、第一楽章の順に吹けよ」とありますが、マエストロはなぜこのように言ったのですか。マエストロがクラシック音楽をどのようなものだと考えているかもふくめて、説明しなさい。

問四 ―線部④「この二日間のマスタークラスで、目が覚めた」とはどのようなことですか、「ぼく」の心情をふくめて説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

平均に近い存在は、よく「ふつう」と呼ばれます。
それでは「ふつう」って何なのでしょうか？

先述したように、人間の脳は複雑なことが苦手です。多様なものは難しく感じます。
複雑で多様な世界を、ありのままに理解することはできないのです。
そのため、できるだけ単純化して、整理して理解しようとしています。
バラバラなものは、できるだけまとめようとしています。

こうして、整理して、まとめることで、人間の脳ははじめて理解することができるようになります。
そんな人間の脳が好んで使うお気に入りの言葉に「ふつう」があります。

「ふつうの人」という言い方をしますが、それはどんな人なのでしょう。「ふつうじゃない」という言い方もしますが、それはどういう意味なのでしょう。

自然界に平均はありません。

「ふつうの木」って高さが何センチなのでしょう。

「ふつうの雑草」って、どんな雑草ですか？

踏まれても生えている雑草と踏まれない雑草はどちらがふつうなのでしょう。道ばたでは、たくさんの雑草が踏まれています。踏まれている雑草は、ふつうじゃないのでしょうか。

先に述べたように生物の世界は、「違うこと」に価値を見出しています。いわば生物は、懸命に「違い」を出そうとしているとさえ言えます。

だからこそ、同じ顔の人が絶対に存在しないような多様な世界を作り出しているのです。一つ一つが、すべて違う存在なのだから、「ふつうなもの」も「平均的なもの」もありえません。そして、逆に言えば「ふつうでないもの」も存在しないのです。

「ふつうの顔」ってどんな顔ですか？

世界一、ふつうの人ってどんな人ですか？

ふつうの顔なんてありません。

ふつうの人なんてどこにもいません。

ふつうでない人もどこにもいません。

ふつうなんていうものは、どこを探しても本当はないのです。

先述したように、人間が複雑な自然界を理解するときに「平均値」はとても便利です。そのため、人間は平均値を大切にします。そして、とにかく平均値と比べたがるのです。

平均値を大切にすると、平均値からはずれているものが邪魔になるような気になってしまいます。

みんなが平均値に近い値なのに、一つだけ平均値からポツンと離れていると、何だかおかしい感じがします。何より、ポツンと離れた値があることによって、大切な平均値がずれてしまっている可能性もあります。

そのため、実験などではあまりに平均値からはずれたものは、取り除いて良いということになっています。

はずれ者を取り除けば、平均値はより理論的に正しくなります。値の低いはずれ者をなかったことにすれば、平均値は上がるかもしれません。

こうしてときに「平均値」という、自然界には存在しない虚ろな存在のために、はずれ者は取り除かれてしまうのです。

しかし、実際の自然界には「平均値」はありません。「ふつう」もありません。あるのは、さまざまなものが存在している「多様性」です。

生物はバラバラであろうとします。そして、はずれ者に見えるような平均値から遠く離れた個体をわざわざ生み出し続けるの

です。

どうしてでしょうか。

自然界には、正解がありません。ですから、生物はたくさんの解答を作り続けます。それが、多様性を生み続けるということです。

条件によっては、人間から見るとはずれ者に見えるものが、優れた能力を発揮するかもしれません。

かつて、それまで経験したことがないような大きな環境の変化に直面したとき、その環境に適応したのは、平均値から大きく離れたはずれ者でした。

そして、やがては、「はずれ者」と呼ばれた個体が、標準になっていきます。そして、そのはずれ者がつくり出した集団の中から、さらにはずれた者が、新たな環境へと適応していきます。こうなると古い時代の平均とはまったく違った存在となります。

じつは生物の進化は、こうして起こってきたと考えられています。

進化というのは、長い歴史の中で起こることなので、残念ながら、私たちは進化を観察することはできません。

しかし、「はずれ者」が進化をつくっていると思わせる例は見られます。

たとえば、オオシモフリエダシャクという白いガは、白い木の幹に止まって身を隠します。が、ときどき黒色のガが現れます。

白色のガの中で、黒色のガははずれ者です。ところが、街に工場が作られ、工場の煙突から出るススによって、木の幹が真っ黒になると、目立たない黒いガだけが、鳥に食べられることなく生き残りました。そして、黒いガのグループができていったのです。

ニュージーランドに棲むキウイは、飛べない鳥です。鳥が飛べないなんて、おかしいですよ。じつは、キウイの祖先は飛ぶことのできる鳥だったと考えられています。ところが、その中に飛ぶことの苦しい個体が生まれました。鳥なのに飛べないなんて、本当にはずれ者です。ただ、ニュージーランドには、キウイを襲う猛獣がいなかったため、飛んで逃げる必要がありません。飛ぶのが苦しい鳥は、飛ぶことが少ないので、エネルギーを使いません。その分、エサも少なくてすむかもしれませんし、節約したエネルギーでたくさん卵を産むことができるかもしれません。こうして飛ぶのが苦しい「はずれ者」が、飛ぶのが苦しい子孫をたくさん産み、飛べない鳥に進化していったと考えられているのです。

あるいは、ブラキオサウルスは、全長二五メートルを超えるような巨大な恐竜です。ところが、ブラキオサウルスの仲間の

エウロパサウルスは、馬くらいの大きさしかありません。ブラキオサウルスの仲間にしては、とても小さな体なのです。

エウロパサウルスの祖先は巨大な恐竜だったと考えられています。ところが、エウロパサウルスはエサの少ない島で進化をしました。そのとき、小さな体の者が生き残り、やがて、小さな恐竜へと進化を遂げたのです。

新たな進化をつくり出すのは、常に正規分布のすみっこにいるはずれ者なのです。

（稲垣栄洋『はずれ者が進化をつくる 生き物をめぐる個性の秘密』）

問一 — 線部「ふつうなんていうものは、どこを探しても本当はないのです」とありますが、なぜ人間は「ふつう」を想定するのですか、説明しなさい。

問二 筆者が述べる、生物が進化していく過程を百二十字以内で説明しなさい。

三

各文の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- (1) スイソク¹の域を出ない。
- (2) オウロ²はバスを利用する。
- (3) トキはキシヨウ³動物だ。
- (4) それはシュウチ⁴の事実だ。
- (5) 一度勝ったからといってユダンタイテキ⁵だ。

第一回入学試験 解答用紙 【国語】

受 験 番 号
氏 名
得 点

このらんには
何も書かないこと

1

2

3

4

5

6

7

--	--

--	--	--

--	--	--

--	--	--	--

--	--

[illegible]

(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	